

入選 中学生の部

へアドネーション

静岡市立安倍川中学校 二年
池田 こころ

私は、夏休みにへアドネーションをしました。へアドネーションというのは、髪を寄付する取り組みのことで、寄付された髪はウィッグになり、病気で髪が抜けて困っている十八歳以下の子供たちに届けられます。

この取り組みをしようと思ったきっかけは小学六年生のとき、そろそろ髪を切りたいと言った私に親がへアドネーションという活動があると教えてくれたことです。その頃の私は寄付や福祉に興味があつたし、目標に向かって何かを頑張ってみたかったので、やることに決めました。実際、私の髪は量が多いため重いし、髪を乾かすのも大変で、あきらめたくなったこともありました。

毛量が多いのは私にとって嫌なことだけれども、へアドネーションにおいては利点で、喜ばれると思つたから続けることができました。へアドネーションができる長さになつたと知つたとき、とてもうれしかったです。髪を切る日が待ち遠しく感じました。

へアドネーションをする当日、どんな風に髪を切るのかワクワクしました。美容師さんはまず髪を分けてゴムで結びました。次に三十センチ定規できつちりと測り、そして結び目の上をていねいに切つてくれました。切り終わった毛束を見せてもらったとき、とうとう切つたんだなあ、と実感がわいてきました。初めての小さな社会貢献は、ずっと忘れないでしょう。

ウィッグをもらう子は、病気で抗がん剤などの強い薬を使って髪が抜けてしまったのだと思います。とてもつらいだろうし、恥ずかしく感じる子もいるのではないでしょうか。日々病気を治すために頑張っているのに、薬の副作用でさらにつらい思いをしなければならぬのは悲しいと思います。ウィッグで、少しでも気持ちが楽になるようになって

たらうれしいです。

私がへアドネーションを通して学んだことは、目標に向かって頑張る大切さと達成感、そして小さな行動で人の役に立てる喜びです。これらは日常でも意識していきたいと思つます。そして、今後またへアドネーションに挑戦して、顔の見えない誰かに小さな幸せを送りたいです。



まねをして人を笑顔に

静岡県立浜松西高等学校 中部部 一年

伊藤 希恵

中学生になり、バス通学をするようになった。それまでは、ほとんどバスを利用することとはなかった。だから、バスに乗るようになり、バス内での親切行動が多いことに驚いている。その中でも、特に私の心に響いた「小さな親切」を紹介する。

その日は雨だった。部活が終わり、「やっと家に帰ることができる。」という気持ちでバスに揺られていた。隣に座っている人の寝ている様子を見て、自分もうとうとし始めたとき、突然、「運転手さん、手伝って。」という声がバス内に響き渡った。はっと目が覚めた。何事だろうと思いい、見渡すと、バスの入口のところで、「雨に濡れたおばあさんが」手伝ってほしいの。だから来て。」と運転席の方に向かって言っていた。そのおばあさんは、足が悪く、シルバーカーを押していた。女性の運転手さんが慌てて駆けつける中、入

口付近の席に座っていた高校生が、「何かすることはありますか。」と声をかけた。おばあさんは、少し驚いた様子だったが、笑顔で「じゃあ、これをバスに乗せてくれる。」と言った。その高校生は、おばあさんが押していたシルバーカーをバスに乗せると、手をつないでおばあさんがバスに乗るのを手伝い、自分が座っていた席を譲った。おばあさんがバスを降りるときにも、シルバーカーを降ろすなど手助けをしていた。その高校生の思いやりあふれる行動とおばあさんが高校生に向かって言った「ありがとう。あなたのおかげでも助かったわ。」という言葉が、私を含め、そのバスに乗っていた人たちの心を穏やかにしてくれた気がした。運転手さんもほっとした感じで「ありがとう。」と言っていた。

親切行動は、してもらった人だけでなく、した人、その周りの人など多くの人の気持ちをあたたかくさせるのだと実感した。しかし、いざ親切行動をしようと思っても、なかなか実践できないのが私の課題である。その日も、たとえ隣に寝ている人がいなかったとしても、きつとあの高校生のような行動は出来な

かったと思う。だから私は、困っている人がいるときに、さっと行動ができるその高校生を尊敬している。また、高校生までではなくとも、バスの運転手さんや呼ぶなどではできなかったかもしれない。

次こそは、前に出よう。日頃から周りをよく意識していこうと思う。このような親切行動を見る機会が増えたことをきっかけに、人の良いところをまねしていきたい。そして、多くの人を笑顔にしたい。



入選

心のワクワク

藤枝市立大洲中学校 三年

大石 華姫

「コロナ陽性です。」

修学旅行三日前、弟がコロナウイルスに感染し、私は濃厚接触者となった。

コロナ禍になり三年、大きなイベントが次々と延期されていく中、二年ぶりに京都・奈良への修学旅行が決まっていた。

京都へは一度も行ったことがない私は、有名なお寺やお店の資料を集め、クラスの仲の良い五人でおそろいのバック、キーホルダをつけたくさんの写真を撮ることを想像し、ワクワクが止まらない毎日を送っていた。三日目の自由行動では、着物を借りて京都の町を散策、和スイーツを食べられるカフェに行つて…。

しかし、修学旅行三日前、弟が発熱。

「どうかコロナでは、ありませんように」と願うことしかできなかった。それから数時間後、母からの電話で陽性を知った。電

話を切り、心配や悲しみ、悔しみや苦しみ、多くの感情が私を襲った。

「どうして私なの？」

「どうしてこのタイミングなの？」

「あんなに楽しみにしていたのに…」

もう修学旅行に行けないんだ。私の中で膨らんでいた期待が一瞬にして弾けたような感覚。

次の日、母と相談し仲の良い五人には、行けなくなったことを打ちあけた。すると一人の子から「修学旅行、行けなくなっちゃったんだ…変わりにうちわ作ったよ！旅行中、ずっと持ち歩くね」と私の顔と名前の入ったうちわを作ってくれた。

私は自分のためにここまでしてくれる友人が居ることとても感動し、涙があふれた。自宅待機期間が終わり学校へ行くと、廊下や教室に貼られている修学旅行の写真には、私がたくさん写っていた。変わる変わる違う友人がうちわを持って笑顔でいた。「ありがとう」私のどうしようもなくこみあげてきた感情はとても温かかった。私も行けたんだ。いくら辛い状況におか



れても人の優しさにふれた時、厭世的な思考は感謝で書ききれ、いづれその体験を他者へと繋げていける、そんな自分でありたい。

一日一善を通して

森町立旭が丘中学校 一年

岡本 陵助

僕は、毎日一日一善をすることを心がけている。僕が一日一善を意識し始めたのは、小学校四年生の頃だった。始めたきっかけは、その四年生の時の担任の先生が学級で、「一日一善をしましょう」といった、企画のようなものから、まず「一日一善」という言葉を知ったことだ。それから、クラスの中でも、一日一善をしようと心がける人が増えてきて、友達が自分に、小さな良いことをしてくれると、気持ちが良くなり、自分もやろうと思えるようになった。そこからは毎日、学校に行った日は、必ず一日一善をするようになり、五年生、六年生、中学一年生と、毎日毎日、一日に一回は、小さな親切をしていた。だが、その四年生のときの担任の先生に出会うまでは、小さな親切どころか、親切など全くしていなかった。また、親切をしたら、どれだけ

気持ちが良いかを知らなかっただろう。

それから、当時は先生や、友達からの信頼も薄かっただろう。だが、一日に一つでも、親切をするだけで、少し信頼も厚くなっていったと思う。そして、一日一善をする、毎日生きていて、やりがいを感じられる。

その一日一善の中でも、僕が特に意識していたのは、二つある。

一つ目は、トイレのスリッパを揃えることだ。小学校のトイレスリッパは、一つのトイレに三つあって、その中の一つは、僕がトイレに行くと、だいたい、遠くに飛んでいた、裏返ったりしていた。しかし、それを見ても、「汚いから触りたくない。」と言う人ばかりで直す人は、ほとんど居なかった。でも、週に一度ある、保健委員会の放送で「トイレスリッパが揃っていた学年を発表する」という機会があり、そこから僕は「呼ばれない」と思い、トイレスリッパを揃えることを意識していた。その思いと努力が実り、毎週「トイレスリッパが揃っている学年」として、呼ばれるようになった。

二つ目は、落とし物を拾うことだ。これは、隣の人などが、授業中に鉛筆や消しゴムなどを落としたときに、率先して拾うことだ。落とし物を拾うと、拾った方も、落として拾われた方も良い気分になる。

こうした、ほんの少しの親切をしただけで、親切をした方も、された方も、どちらも良い気分になれる。また、親切には、こういう影響もある。もちろん自分は、親切をすると良い気分になり、「またやろう。」と思える。だが、親切をされた方も、されるとこっちも良い気分になり、「お返ししよう。」や、「他の人にもやろう。」と思える。だから、親切をすると皆が良い気持ちになっていき、さつきも言ったように、親切がどんどん連鎖していく。また、親切はした人の性格や、人柄を変えるような大きな力を持っている。親切は、皆が良い気持ちになり、幸せになるから、世界中に広がっていったほしい。



入選

十文字を言う勇氣

浜松市立舞阪中学校 三年

亀久保 遥斗

「なんであんなことしたんだろう。」僕は後悔しながら、大雨の中を歩いていた。

僕は、中学校から家に帰る時、バスを使っている。ある日、僕がバスに乗っている時のことだった。僕は、バスの出発地点から乗車するため、座席にあまり人がいない状態で座れている。だが、その日は雨が降っているせいかバスを利用する方が多く、満席であった。席が空いていなかった場合、僕は基本座らず吊革を掴んで立っている。だが、その日は疲れが溜まっていて、どうしても座りたい気分であった。優先席は空いていたため、僕は優先席に座った。左右に揺られ、心地の良い気分であった。いくつかのバス停を通過した時、一人のご年配の方が乗車した。この時僕は、「席を譲ろう。」そう思っていた。だが、この時は相当疲れが溜まっていたのだろう。普段の少

しの疲れならば絶対に譲るものの、僕は、「どうしても座っていたい」と思っていた。普通席に座る人の視線が優先席に座っている五人に向けられる。「他の人四人もいれば誰かしら席を譲ってあげるだろう。」と思っていた。しかし、次のバス停に着くまで誰も席を譲らない。僕はちょうどそのバス停で降りるため、何も言わずバスから降りた。バスから降りた後、僕の心にはもやもやが残っていた。「良かったら席どうぞ。」の十文字がなぜ簡単に言葉にできなかったのか、なぜ誰かが譲ってあげるだろうと考えてしまったのか。そんな悔やむ思いが僕の心に重くのしかかる。そんな行動をとった僕に激怒したかのように雨は強くなる。家までの帰り道が長く感じた。

あの時から二週間ほどたったある日、その日は雨が降っていた。また今日もバスを利用して帰る。僕が乗った時は席が空いていて、普通の席に座ることができた。だが、次第に人が増えていき、数分で優先席まで全てが満席になった。そして、バスが出発する直前、少し駆け足のご年配の方が一人

乗車した。席は空いていなかった。僕ははつとなり、あの日のことを思い出した。「今度こそ自分が譲らないとだめだ、自分から声をかけないと。」と思い、勇氣をふりしぼってその方に声をかけた。

「良かったら席どうぞ。」

十文字を言うことができた。ご年配の方は、「ごめんね、ありがとう。」

と言った。嬉しかった。胸中から何か湧き上がるものを感じた。バスを降りてからの帰り道はとても清々しい気分だった。帰る時の空は綺麗な青空に見えた。

小さな親切を行うことが恥ずかしく、行動をためらう人もいるかもしれない。だが、何かをしないことには何も始まらない。僕は、この出来事を通して、勇氣を振り絞って声をかけることの大切さを知った。やらない後悔よりやる後悔、何事も勇氣を出してやってみる、という強い意志が大事だと思っただ。

友達とのファインプレー

学校法人日本体育大学浜松日体中学校 一年

菊池 藍衣利

ある夏休みの日のこと。私は部活動で学校に行っていた。暑い日でも疲れた。部活動が終わり、学校のロータリーに向かった。友達がいたので、同じベンチに座り、迎えを待っていた。すると、隣のベンチに落とし物があることに気付いた。それは、透明のカード入れに、記名されたプリペイドカードが入っていたポーチであった。私達は、先生に届けようと思った。しかし、友達の迎えが来てしまった。友達は、「ごめん、届けてくれる？ありがとう。じゃあねー。」

たと思っていた友達が一緒に届けようと、私のために戻ってきてくれていたのだ。友達のお母さんを待たせてはいけないと、私は急いで、今度は二つある体育館を回った。そしてようやく、先生を見つけることができ、無事に落とし物を届けることができた。暑い日に、汗を流しながらしばらく走ったが、落とし物を届けることができた達成感と嬉しさで、心が満たされた。私は友達に、お母さんを待たせてまで戻ってきてくれたこと、一緒に届けてくれたことに對して、心から、「ありがとう。」と言った。友達は、「こちらこそありがとう。」と返してくれた。その言葉に私の心は温かくなってきた。まさに、友達とのファインプレーだったと思う。

な人になりたい。親切はする側もされる側も、心が晴れ晴れすること、人は人と支え合っていることを、この出来事を通して感じることができた。これをきっかけに、行動できるところから、親切を実行していきたいと思っ

た。

日本人は、正直で誠実であると聞いたことがある。財布を落としても、日本人は拾って、持ち主が分かっている場合は、返してくれる。海外ではあり得ないそうさ。ある実験では、百パーセント、持ち主に、日本人が財布を返してあげていた。同じ日本人として、とても誇らしいことである。

日本人の心の温かさ、優しさ、日本の平和さがわかる。そんな日本を誇りに思う。だからこそ、そのような優しく親切な人を増やすために、気付いたら行動に移したり、誰かの親切を真似したりして、親切の輪を広げること、今よりもっと幸せな日本を築いていきたい。

入選

親切の力

静岡県立浜松西高等学校 中部部 三年

窪野 月香

先日、母と楽しみにしていたピアノのコンサートに行った。二百人程が入れるそのコンサートは自由席で、先着順に好きな席に座れることが分かっていた。三歳からピアノを習っている私は、コンサートを楽しむ気持ちと共に、ピアノリストの手元やペダルの踏み方を近くで見て学びたい気持ちもあった。私と母はよく見える席に行きたくて、早めにホールに行こうと前々から決めていた。着いた時には既に二十人くらい並んでいたが、これなら希望の席に座れそうだね！と並んでいる間もワクワクした。開場時間になり、私と母は、「しもて側」の三列目の席を取った。通路横だし、ちょうどピアノの鍵盤がしっかり見える良い席が取れた。座ってプログラムを見ていると後ろから声が聞こえた。

「びゅっ、見えそっっ。」

「うーん、あんまりみえない。」
小さい子とそのお母さんの会話のようだった。

「席、替わりましょうか？」

隣に座っていた母が、後ろを振り返りながら席を立った。私は（えっ…）と思ったが、慌てて母に合わせて立ち上がった。小学校低学年くらいの女の子とお母さんが、後ろの席に座っていた。

「いえいえ、悪いですから。」

と女の子のお母さんが言った。

「大丈夫です。うちの方が大きいですから。」
と母が返す。

「いいんですか？ありがとうございます。」
そう言って、女の子とお母さんは私たちが座っていた席に座り、私たちは二人が座っていた席に座った。

私はせっかく良い席を取れたと思っていたのに、後から来た二人に譲ることが理解できなかった。

コンサートが始まると、女の子はピアノを真剣に見ていた。私と同じように、ピアノを習っているのかな、と思った。曲

と曲の間では、お母さんと感想を話し合っているのか、楽しそうだった。

私はそんな二人を見て、（席を譲って良かったな）と思った。同時に、自分のことしか考えていなかったことを反省した。そして、私は母のような人になりたいと思っただ。気付いたらすぐに、すつと自然に、他人のために行動する母の姿が、かつこよく思えた。

また、親切は人の心を温かくしてくれるものだな、と思った。女の子と、お母さんは、笑顔で嬉しそうに見えた。私もそんな様子を見て、心が温かくなった。

親切には、人を温かさで包み込むような、不思議な力があるように思った。私は、その力を多くの人に届けられる人に成長したい。

「誰かのヒーロー」

静岡市立蒲原中学校 三年

栗原 微始

「邪魔なんだよ。一人じゃ動けもしないのに、電車になんか乗るな。迷惑。」

心の無い言葉を平然と浴びせる中年男性。それを見ていたまわりの人達も、その言葉に賛成するように、車椅子の男性に冷やかな視線を向けていた。どこからか、舌打ちの音も聞こえ、車椅子の男性の手は小刻みに震えている。私は「そんなことない。迷惑なんかじゃない。」と声をあげてやりたい気持ちでいっぱいだった。しかし、車椅子の男性を悪者扱いしようとする強い圧に、どうしても逆らうことができなかった。

「すみません。迷惑かけてしまってます。」

結局、いつも車椅子の男性が謝ることで、早朝の電車は事なきを得る。けれど、車椅子の男性を見ると悲しそうに俯いていて、私は自分の無力さに打ちのめされた。車椅子の男性は何も悪いことをしていない。た

だ私達も、困った時に人の手を借りるのと同じように、協力してもらって電車に乗っただけだ。そんな「普通」のことをしているだけでも関わらず、謝らせてしまっていることがとても心苦しくてならなかった。

そんな日が続いたある日、今日も電車の中は嫌な雰囲気包まれていた。また今日も、車椅子の男性に「すみません。」を言わせないといけないのかと思うと憂鬱だった。そう思うのに、行動をおこせない根性なしの私が一番許せなかった。そんな時、突然ヒーローは現れたのだ。

「大丈夫ですよ。」

颯爽と現れた高校生らしき男性の二人組。彼らは私たちがためらっていた言葉を平然と言ったのけたのだ。

「迷惑なんかじゃありません。電車は誰のものでもないし。困っている時は、お互い様ですよ。」

車椅子の男性は、しばらくびくくりしたような顔をしていたが、我に返って目に涙をうかべながら、初めて「ありがとう。」と言った。誰からともなく拍手がおこって、

車内は先程までの雰囲気か嘘のように穏やかだった。

その後から、車椅子の男性へ心無い言葉をかける人はいなくなつた。また、それに留まらず「お手伝いしましょうか。」と声をかける人までいるのだ。この親切の輪が広がったのは、紛れもなくあの二人のヒーローのおかげだと思う。親切心とは、一見わかりずらいだけで、人なら誰でも持っている。けれど、不安になると親切心にバリアがはられ、つい知らないふりをしてしまう。私もそうだった。しかし、あの二人のヒーローのように私も誰かのために親切になれる勇気をもちたい。また、自分の親切心にはるバリアを、打ち壊せるような強い心をもって生きたい。次、誰かが困っていたら、自分が迷わず助けよう。私も困っている誰かのヒーローになるために。



入選

おばあちゃんの心くばり

牧之原市立相良中学校 一年

四ノ宮 采美

中学生になって、新しい出会いがあったり、環境が大きく変わったりしてきました。すると、少しずつ人との色々な接し方が気になるようになってきました。

私には、一緒に生活しているおばあちゃんがあります。おばあちゃんは周りの人とたくさん関わりをもち、誰とでも丁寧に接することができるおばあちゃんです。なんでもうまく接することができるのだからと私は気になり始めました。そのおばあちゃんには、

「心くばりって大事だよ。」

その言葉の意味を私は知らないままいつも生活をしていました。ふと、心くばりって何だろうと思ひ、そこからおばあちゃんの姿を追うようになりました。

おばあちゃんの心くばりの様子は、いくつかの場面で気づくことができました。例

えば、家の周りや畑の草とりに時間を掛けて汗もかきながら取ってくれています。なぜ、そんなに頑張ってくれているのか、私なりに考えてみました。初めは、家族が外に出る時など、家の周りを見ますがしい気持ちになるからだと考えていました。なぜかと聞くと、

「家族や家に来て下さる方々にも気持ちよくおいでてほしいからだよ。」

と言いました。私はそのことが、おばあちゃんのおもてなしのように思えました。

ピアノの練習をしている時には、うまくいなくて悔しい気持ちになったとしても、

「上手になってきているから大丈夫だよ。」

と温かく励ましの言葉を言ってくれました。私だけでなく、周りの人にも温かな声を掛けていました。どうしてそのようなことができるのか聞いたのですが、

「自然に行っていることだよ。」

と言った驚きました。それではよく分からないので、更に詳しく尋ねることにしました。おばあちゃんは、

「昔から相手が喜んでくれることや助かるだろうということをいつも自分自身で考えて行動するようにしてきたんだよ。」

と話をしてくれました。自分だったら、近所の人には挨拶しかできていないので、声掛けを自然にできているおばあちゃんって凄く素敵だなと感じました。

私はおばあちゃんの姿から、日常の中の小さな心くばりの積み重ねでも、人との温かいつながりができるきっかけになっていくと感じるようになりました。そこで、小さなことでも気付いて相手に伝えられる人になっていけることを目標にしました。少しずつですが周りに目を向け意識するようになりしました。まだまだ自然に心くばりをするおばあちゃんには追いつけないけれども、もっともっと自分なりの心くばりを見つけていきたいです。視野を広くして、良さに気付いて言葉を伝えたり、相手が困っていたら行動したり、人の心を温められるそんな人になりたいです。

親切の連鎖のために

学校法人磐田東学園磐田東中学校 三年

鈴木 千穂

二〇二〇年、世界中に「新型コロナウイルス」という脅威が増え、人々の生活が大きく変わりました。一番大きな変化は人との関わりの場が減ったことだと思えます。

私は今まで日常生活にある人との関わりの場で沢山の優しさに触れ優しさに助けられてきました。日本をはじめとし、今の世界は優しさが少し足りていないように思えます。有名人に対する誹謗中傷や暴力行為、小さな不満が溜まってしまつて他の人にあつたつてしまつて事件が増えていきます。「思いやりは心のワクチン。」このテーマを聞いて私が身の周りの大切な人の為にできることを考えてみました。

一つは、話をしている時に笑顔でいること。ムスツとした顔で会話をしているも、楽しさは半減してしまい勘違いされてしまうかもしれません。笑顔には無限の力があ

ります。相手を楽ししい気持ちにすることはもちろん、安心感や幸せな気持ち、自分にとつても前向きな気持ちを持つことができます。なによりも笑顔は万国共通です。たとえ言葉や価値感が違つても笑顔だけは相手の気持ちをストレートに受け取ることができます。世界中で不安が広がっている今こそ、皆が笑顔を心がければ、同じ道を迷わず歩いて行けると私は思います。

二つ目は、周りをよく見ること。困っている人はいないかな、汚れている場所はないかな、と少し周りに目を向けるだけで自分にも余裕ができます。困っている人のお手伝いをしたり、汚れている場所を少しきれいにするだけで周りにもその気遣いが伝染していくはずで。小さな親切が大きな親切となり、皆の心を豊かにします。

私はメジャーリーガーの大谷翔平選手を見て、ゴミ拾いを始めました。ゴミを拾うために周りを見ることで自分にも余裕が生まれ、きれいになった場所を見ると清々しい気持ちになります。私が大谷選手から学んだように私の周りの誰かが私を見てゴミ

拾いを始める。そうした小さな親切の連鎖が何よりも素敵なことだと思えます。

国籍や性別、宗派や思想が異なつていても、親切にしてもらつてうれしい気持ちは同じ人間ですから、違わないはずで。これから先この地球上で誰一人肩身の狭い思いをせず、幸せに暮らしていくために、私たちは小さな親切を繋いでいかなければなりません。

小さな親切が心のワクチンとなり、温かな世界が訪れることを心から願つていきます。



入選

「祖父のように」

富士宮市立芝川中学校 二年

清 美智花

今年の夏に、祖父が八十六歳で亡くなりました。祖父の家に遊びに行くと、祖母と一緒にこやかに出むかえてくれたことを思い出します。

祖父は、兄が小学校一年生になってから私が小学校五年生になるまでの約十年間、交通安全活動として、朝の六時半から七時半ぐらいまで横断歩道の側に立ち小学生や中学生が交通事故にあわないようにと、見守りをしてくれていました。

祖父は、見守りをしている間中はずっと挨拶をしていました。たいていは、祖父の方から生徒に笑みを浮かべて、

「おはよう。」

と声をかけてくれたり、祖父には愛用の腕時計があり、時間がおそくなると、

「もう何時になるよー。」

と教えてくれていました。転んでケガをし

た子がいたら渡せるように、ばん創こうをいつも持っていました。

祖父は、自分にきびしく、人には親切な人でした。そして周りの人からも優しくされていたと思います。まさしく、情けは人の為ならずで、優しさが祖父の周りで巡回していました。

日本のコメディアンであり、映画監督をされているビートたけしさんは、このような名言を放っています。

「人の気持ちを良くさせる方法ってたくさんあるけど、挨拶ってその中の一つだよな。」

という名言です。私は、この名言の通りだと思いました。登校している時や下校している時に、どんななやみがあっても、いらいらしていても、近所の人に、「おはよう、いつてらっしゃい。」とか「おかえり」といわれるとなぜかうれしい気持ちになり、スッキリします。だから私も挨拶をしてくれた人に対してお礼の気持ちを持って挨拶を返します。

私は、中学生なので、祖父のように毎日横

断歩道の側に立ち見守ることはできませんが祖父のように挨拶することはできます。祖父を見習い、挨拶をして、相手に笑顔をあたられたら良いなと思います。もちろん、近所の人達だけではありません、親や友人にも挨拶をし、感謝の思いを伝えたいです。そして、私が大人になった時、祖父のようにボランティア活動をし、私の周りでも優しさが巡回するようになると思います。



優しさの循環

浜松市立八幡中学校 三年

瀧澤 奏乃

ほんわかと、じんわりと…。

人に親切にしてあげると私の心がほんわかと温かくなる。人から親切にしてもらうと私の心はじんわりと温かくなる。私にはそんな経験がある。

私は消極的な性格で、みんなを引っ張っていたり、みんなの前で活躍するほどの力はない。でも、ちょっとした親切なら結構しているように思う。

以前、広報委員の子が慌てた様子で作業をしていた。

「どうしよう。締め切りまでに終わらないかも…。」

と言って困り果てた様子だった。私は整備委員なので直接関係はなかったが、

「大丈夫？手伝おうか？」

と声を掛けて、作業が全部終わるまで手伝いをしたことがあった。

また、下級生の子が届かない高さの場所に掲示物を貼ろうとしていたとき、代わりに貼ってあげたこともあった。他にも、元気のいい友達を見かけたとき、そばに行って話しかけ、相談に乗ってあげたこともあった。

どれもちょっとしたことではあるが、そのあと必ず相手から笑顔で「ありがとう。」と言われた。私の心がほんわかする瞬間だ。

反対に、私が友達から親切にもらった経験ももちろんある。

新年度、クラスが変わり、仲の良い友達がクラスに居なくなると私は一人ポツンとなる。四月によくある光景だ。そんなとき声を掛けてきてくれる友達、私にとっては救世主だ。また、数学で分からない問題があっただけだったとき、丁寧に解き方を教えてくれる友達、そういう友達も頼りになる存在だ。ほかにも私が落ち込んでいたとき、優しく声を掛けてくれる友達、涙があふれそうなほど嬉しかったことを覚えてい

る。
友達からそんなふうに親切にしてもらっ

た私は、やっぱり笑顔で「ありがとう。」と言う。私の心がじんわりする瞬間だ。

親切は人の心や身体の負担を軽くしてくれる。私は人から優しくしてもらうと、私も人に親切にしたいと思う。きっと、周りの人たちも同じように、親切にされるとその人自身もまた他の人に親切にしたいと思うのではないか。親切は次の親切にどんどんつながっていくのだと思う。私はこれからも相手の心に寄り添い、思いやりの気持ちを持ち続けていきたいと思う。ほんわかと、じんわりと…優しさが次の優しさにつながっていくことを願って。



入選

親切の力

掛川市立西中学校 一年

中沢 日咲

「親切って何だろう。」私はお母さんによく、「やさしいね。」と言われる。でも自分のどこがやさしいのかが分からなかった。

私は、中学生になってから、小学校のときは全く違う空気で緊張しすぎて教室に行けなくなっていました。そんな時もお母さんは、私の話をたくさん聞いて、なん度も勇気づけてくれた。私はステップルームという、学校にある、心を落ち着ける教室に行くことになった。ステップルームの先生と一緒にいると私の心を、温かくしてくれた。また、いろんな先生が私の話を聞いて応援してくれた。私は、教室に行くという気持ちができ、友達に予定を教えるもなかった。その友達も何も文句を言わずに、やさしく教えてくれてとてもうれしかった。それから、何時間か教室に行くことができた。教室では、男の子が私を笑わせて

くれたり、女の子がやさしく、話しかけてくれた。だれも、冷たい顔をせず、温かくうけいれてくれた。私は、それから少しずつ教室に行く事ができる様になった。

私は、たくさんのお母さんのやさしさに助けられた。みんなが応援してくれてものすごくうれしかった。たとえ小さなやさしさでも、私にとっては、心の栄養になった。このとき「親切」という言葉の意味が分かった。私が思う「親切」とは、相手の心の支えになったり、みんなが温かくなる行動のことだと思った。クラスみんなは、私にやさしくしてくれた。先生たちも応援してくれた。そして家族は、私のことを勇気づけてくれた。私は、すべての気持ちを温かく感じ、心の支えになった。そしてすごくうれしかった。私はすべての親切に感謝したい。お母さんが勇気づけてくれたこと、いろんな先生が話してくれたこと、男の子が笑わせてくれたこと、まずステップルームという場所をつくってくれたこと、クラスみんな、など数えきれないほどの親切に助けられた。ほんの少しの親切が集まり、大き

な、大きな親切になった。

私は、何も考えずにしていたことが、お母さんにとっては、支えや心が温かくなり私に「やさしいね。」と言ってくれたのかもしれない。親切には、いろんな形があると思う。でもどんな親切にも相手が温かくなる力がある。小さなことでもできることをして、私も、もっと相手の心を温かくしてあげたい。

このように、私は数えきれないほどの親切に支えられた。そして、小さな親切でも私にとってはうれしいことだとも分かった。だから、これからもっと親切なことをして相手の心を温めたいと思った。また、今までのことに感謝をして次につなげていきたい。

「笑顔を増やすために」

静岡市立蒲原中学校 三年

橋爪 杏奈

助けを必要としている人に対しての気遣う声かけや実行させる行動力の大切さを教えてくれたのは、私の友達だった。

私と友達は、出かけるときや通学手段としてバスや電車などの乗り物をよく使用する。時間帯によっては、電車内が人でいっぱいになり、立たざるをえない日もある。大体それは五時を過ぎたときくらいのことです。仕事帰りのサラリーマンやお買い物から帰るおばあさん、学校帰りの高校生などさまざまな人が乗っている。私は疲れた様子の人々を見て、人事のように大人になるにつれて大変なんだなと思いつつながら最寄り駅で降りることが習慣になっていた。

その日も私は、友達と二人で家路についていた。お互いにあった出来事や好きなのについて話しながら歩いて、いつも通り電車に乗った。その日は運が良かったの

か、たまたま座席が空いていたため、暑い中行った部活動で疲れきっていた私たちがすぐに座った。次の駅で停車し、ドアが開けられた。乗ってきたのは、おばあさんだった。手には、食材でいっぱいになったエコバッグを重そうにしてもっていた。よいしょよいしょと揺れ始めた電車を歩いていた。その時には、もう空いている座席はなくなってしまうようで、手すりに頑張っつかまって電車の揺れに耐えていた。誰か替わろうとしている人はいらぬのだろうかと周りを見わたしてみたが、そんな人はいなかった。なら、私が替わらなくてはならないんじゃないかと思った。友達は目を閉じて休んでいたもので、この光景には気が付いていないようにみえた。私はそんな友達にしか聞こえないように、小声で「立ってる事が少しつらい様子のおばあさんが乗ってきたんだけど、替わってあげた方がいいよね。」と耳打ちした。

その瞬間立ち上がったのは、友達だった。友達はおばあさんの所まで行き、「あそ

この席に座ってください。」と声をかけた。おばあさんは、疲れているでしょうと返事をしたけれど、友達は「私はもう次の駅で降りるので大丈夫ですよ。よければ座ってください。荷物も私が持ちましようか。」と二言目もつけたのだ。そんな友達の優しさで行動力を目の当たりにして、自分が悩んでいた事がとても小さなことだと思えた。それに加え、自分には勇気がないなど感じた。

友達が私に教えてくれた、優しさで行動力と勇気の大切さ。私にはまだ、簡単にできる事ではないけれど、いつか私も人助けをして笑顔を増やしたいと強く思った。



間接的な優しさ

浜松市立引佐北部中学校 三年

廣瀬 麟

「いえ、僕が遊んでもらってたんですよ。僕の方こそありがとうございます。」

聞こえてきたその丁寧な言葉に、僕は一瞬耳を疑った。思わず声が出た方を見ても、そこには僕の先輩と、小学生の男の子と、その子を迎えに来たお母さんしかいない。ということは、やはりさっきの言葉は、先輩が発したものだ。

先輩は、しばらく前から迎えが来るのを待っている小学生の男の子たちと外で一緒に遊んであげていた。やんちゃな小学生の男の子たちは、先輩とサッカーや追いかけっこをして、つかまりそうになると、先輩に向かってパンチを繰り出したりもしていた。もちろん先輩も含め、みんな笑っていたけれど、小学生の男の子と遊んであげるのは、疲れるものだと僕は知っている。先輩も大変そうだなあと思ったけれど、僕

はそこには加わらなかった。小学生に気を使って、手加減して、それに体力は使わず、暑いし。こちらに遠慮しない相手と、一緒に遊んであげるのは、苦勞しかない。

そこへ、遊んでいたうちの一人の男の子のお母さんが迎えに来た。

そして、そのお母さんが「いつも一緒に遊んでくれてありがとうね。」と、一緒に遊んでいた先輩に声をかけた。すると先輩は、さっきの「僕が遊んでもらっていた。」という言葉をお母さんに返したのだ。

僕は心底驚いた。普通、あんな状況であんな言葉は出てくるだろうか。いや、とても出てこないだろう。明らかに先輩が面倒を見ながら遊んであげていたのに、その事を恩に着せず、逆にお礼を言うなんて。僕にも、小学生と一緒に遊んであげることができるが、自分が遊んでもらっているという発想は出てこない。先輩はどういう気持ちでああ言ったのだろう。

「情けは人のためならず」ということわざがある。人に向ける親切な行為や気持ちは、巡り巡って自分に返ってくる、という

意味だ。先輩の発言は、こういうことなのかな、と思う。もちろん先輩は、「自分のため」と思って打算的に小学生と遊んであげていたわけではないだろう。無意識に出たからこそ、先輩の態度や言葉が、ああ言われたお母さん感激させ、僕の心にも響いたのだと思う。

人に親切にする、優しくするということは何も直接的な行動だけであるものではない。先輩は僕に何かしてくれようと思ってあの発言をしたわけではないけれど、僕はとても良いお手本を見せてもらってきた。それは間接的に僕も「優しさ」をもらったということだ。先輩が僕に見せてくれたように、僕も「親切」や「優しさ」を周りの人に与えられるようになりたい。

人助け

島田市立六合中学校 三年

藤本 稟子

自分の近所に障害をもっている人はいませんか。私が住んでいる地区には目が見えなくて白杖を使っている人がいます。その

人はいつも同じ道を白杖を左右にふって道の段差を確認しながら歩くという練習をしています。ある日、私が犬の散歩から帰ってきたときに犬を飼っていていつもエコキヤップをくれたりする近所の人が白杖を使っている人に曲がり角の場所と段差がある位置を教えてくださいました。そしてその人の体を進みたい方向にむけてあげていました。私はその人をよく見かけていたけれど、自分から声をかけることをしたことがありませんでした。だから声をかけて助けていたその人には尊敬の念を覚えました。近所の人は地域の人によく声をかけていました。だからどんな人ともしゃべることができると思っていたけれど障害をもっている

人にもしゃべりかけられるというのはすごいなと思いました。見知らぬ人でも困っている人がいたら助けることができると思うけれど、どちらも近所で互いに面識があったからこそできたことでもあるのではないかと思います。だから、地域の人と関わっていくというのは大切なことではないかと考えました。

学校の授業でも地域の人とどう関わっていくのかということを考えて、話し合いをしたりしました。話し合いを通してやはり困ったときに互いを助け合えるような関係にしていこうというのが大切なのではないかと思いました。見知らぬ人に声をかけようししゃべったことがある人のほうが声をかけられると思いました。今回のようなこともそうだと思うし、私の家は両親がいないということが多くて子供だけなので、災害がもし起こってしまったときは地域の人の力を借りることがほとんどだと思います。だから助け合えるような関係にしたいと思いました。

私は今回のような場面に遭遇してあらた

めて自分を見つめ直す機会になったなと思いました。学校生活でも私は発表をしたり、自分から行動するということがまだ足りないなと感じていました。地域の人と助け合える関係にしていこうというのも、自分から何かをしないと関係は変わっていかないと思います。だけど、最初からしゃべりかけるということは無理なのでまずは道ですれ違ったときに挨拶をすることからしていきたいです。学校ではこれから体育大会や合唱発表会があります。自分から行動することができないというところを直すよい機会だと思っています。だから自分にできそうなことにチャレンジしていきたいと思いました。

また、学校生活でもそれ以外のところでも困っている人がいたら助けられるようにしていきたいです。三年生だから学校を引っぱっていく存在として後輩が困っていたときに助けられるようにしていきたいです。人を助けるといえるのはどんなところでもできると思うけれど、そこから自分がどう行動するのかだと思いました。だから相手を助けられるような行動をしていきたいです。



入選

親切を考える

牧之原市立相良中学校 一年

増田 稟南

「親切」って、お手本があるのかなあ。今さらながら時折り私は、そう思います。なぜなら、私は町で出会った初対面の方に良かれと思って行った事を相手の方に迷惑そうな顔をされ、とても悲しい気持ちになつた経験があるからです。よく考えてみれば、私のまわりの家族や友達は、みんなとても優しくして私が「親切」と思ってやる事には「ありがとう」と返してくれる事が当たり前でした。そんな中、「親切」に対して考えれば考える程、相手の反応が気になり臆病になる自分がいました。

ある時、私は家族と出掛けました。人気のあるホテルでスタッフもたくさんいます。夕食はビュッフェです。私は両手でお皿を持っていたので、乗せてあつた箸をポロツと落としてしまいました。父が、近くにいた外国のスタッフにその箸を「すみま

せん落としてしまいました。」と渡してくれました。私も「ごめんなさい。」と伝え、自分で新しい箸を取りに行きました。そして、席について家族と食事を始めようとした時でした。先程のスタッフが息を切らしながら、私達のテーブルに来ました。その手には白い紙ナプキンで、くるんで直接さわらない配慮をした箸が持たれていました。父は、それを見ると「ありがとう」と受け取りました。スタッフは「ニコツ」として頭を下げて席を後にしました。私は、もう自分で持つて来た箸があるのに、なぜ父は受け取つたのか不思議に思いました。が、その後の母の言葉に「ハッ」としました。「親切だね。私達の事を思って、お箸持つて来てくれたんだね。」父も嬉しそうに「急い込んだね食事に間に合うように。」

「そっか…。」私は心の中でつぶやきました。スタッフの親切が伝わって父も受け取つたのでしょうか。もし、もう箸があるからと受け取らなかつたらと思うと私はまたあの臆病になつていた感覚が、よみがえりました。食事前のほんの少しのやりとりでしたが、

私が思っていた「親切」へのモヤモヤは霧が晴れたようです。

「親切」は相手を思いやる気持ちから自然にする行動。そして感謝される事を前提とはせず、ただ相手の為となる事を信じてそれを行動に移しているのだと思います。受ける側も、また、自然と相手を思いやり、相手からの温かな心を感じた時、その行いが胸に響き「ありがとう」と感謝の意を口にするのでしょうか。きっと今までの私の「親切」は、まず、もじもじして相手に受け入れられるか悩んだ末、結局やりすごしてしまう事が多かったのです。

私は、もう悩まない立ち止まらないです。困っている人がいたら自然に声を掛けます。私一人で出来る事は「小さな親切」だと思いますが、スタッフが父を笑顔にしたように私も「親切」から人の輪の花を咲かせたいです。

「祖母の二つの思いやり」

静岡市立蒲原中学校 三年

松永 悠伽

「はるちゃん、今日は何食べたい？はるちゃんの好きなものにするよ。」

祖母は仕事をしている母に代わって、主に食事の支度をしてくれる。母には、

「私をいつまで働かせるつもりなのか。」

と言うが、その顔にはどこか笑みがあるように思う。付け加えて祖母がこう言ったさうだ。

「はるちゃんは学校の事や勉強が大変でもばあば達にも言わないね。だから、せめて美味しいもので元氣付けたい。」

本当にありがたい。正直、母は少しでも私がつまらな顔を見ると、「どうしたの」と聞いてくる。少し黙ってて、と思う時もある。

祖母は多分、私に聞きたいのだろうが、何も言わず美味しい夕飯を出してくれる。私だって話したくない時もある。そっと察してくれる祖母の思いやりにジーンと来たこと

が何回もあったのだ。

夏休みの祖母の昼ご飯は特別だ。祖母は私の若い感覚に何とか合わせてくれようと、ナンをオーブンで焼き、最後にケチャップでデコレーションまでしてくれる。

「はるちゃん、おいしい？」

祖母からの質問に、私は思わず、

「アツアツだよ。」

と言う。もちろん美味しいということも含めての言葉である。しかし、ふと、この返答は間違っているように感じた。私はどうやらボキャブラリー不足のようだ。このコメントでは、祖母に思いやりのある声掛けにはなっていない。そこで、明日こそは祖母が喜ぶ返答をしようと、ネットで「食レポ」を検索した次第である。

祖母は、朝と昼、お経を読むことを日課にしている。決まって最後に鐘を何回も鳴らす。

「ばあば、その鐘ってそんなに鳴らすものなの？」

そういう決まりなのだろうか。聞いてみると、これは祖母のオリジナルらしい。お願

い事が多岐に渡るため、自然と鐘の回数が多くなってしまったらしいのだ。ご先祖様のこと、土地の神様、祖父、娘、もう一人娘、娘の旦那さんのこと、孫三人のこと。朝と昼、毎回お願い事をしてきているのだ。よく考えてみれば、自分のお願ひ事はしていない。なんて無欲の人なのか。

先日、いつもより鐘が倍以上になり、びっくりしたことがある。それは私が翌日、作文を発表する会に出場する日であった。「がんばって」と言えば私が緊張するから、あえて声をかけず、ご先祖様をお願いしている祖母の思いやりが身に染みる。明日は、自分の実力を出し切ろうと心に誓う。

ちなみに、祖父も私に良くしてくれる。今回は書けなかったので焼きもちを焼かないかヒヤヒヤしている。今度は祖父の事を書こう。これが私の小さな思いやりである。



入選

誰かの心のワクチンに

静岡市立美和中学校 一年

宮本 優香

私はコロナ禍になり、親切な行動をするのが少しこわくなりました。私は今まで、

親切とは相手のことを思って優しく接することだと思ってました。けれど、コロナが流行し、相手のためを思ってやっても、相手がどう受け取ったのかは分からないんだなと思いました。

コロナが流行する前に、文房具を買いに行った時のことです。小さな子どもがたなの上にある商品に手が届かなそうだったので、私が取ってあげました。するとその子が大きな声で、「ありがとうございます。」

と言ってくれてすごうれしかったのを覚えています。

けれどこの前、友達とデパートへ行った時に、落とし物をした人を見かけたので拾って声をかけ、物をわたすと、その人は

ありがとうもなく、いやそうな顔をして去っていきました。私はなぜいやそうにしていたのか分からなかったけれど、考えてみると、あの時はコロナの第五波の時期でその人は他の人にさわられるのがいやだったんじゃないかと思う、親切な行動をするのが少しこわくなりました。

新型コロナウイルス感染症は、二〇一九年十二月初旬に中国で一人目がコロナに感染したことから始まり、今年で三年目となりました。

私が小学生の時は、学級閉鎖で学校へ行けず、友達と会えなかったり、色々な行事が中止になってしまっても悲しかったです。

私は、マスクや消毒をして気をつけていましたが、今年の夏に感染してしまいました。四十度の高熱が出て、体がだるく、のどがとても痛かったです。私がコロナになり、お母さんが看病してくれました。お母さんは、自分も感染するかもしれないという不安があった中でも私を看病してくれてとてもありがたかったです。私がコロナに

感染し、お母さんが看病し、周りの人が気づかってくれた親切は、私のつらいことや不安なことから守ってくれる、心のワクチンとなりました。お母さんが私に親切にしてくれたみたいに、私もお母さんに親切にして、お母さんの心のワクチンになりたいです。

私は親切にすることがコロナ禍になり、こわくなったけれど、お母さんに親切にされ、相手に優しくして相手がどう受け止めるかは分からないけれど、自分がした親切に感謝し、ありがたく思ってくれる人は必ずいると思うので、私もだれかの心のワクチンになれるように、これからも優しい心を持って生きていきたいです。



意味のある親切

静岡県立浜松西高等学校 中部部 三年

村橋 優奏

あなたは、人に親切にしたのにも関わらず相手から感謝の言葉を聞けなかった時、どんな気持ちになるだろうか。きっとその人に良い印象は持てないだろう。私自身、そんな時は相手に対してモヤモヤしたり、「この人は非常識だ」と思ったりした。しかし、ある経験を通して、感謝されなかったために不満を覚えるということに対し、おかしいと感じるようになった。

ある朝のことだ。私は、学校へ向かう途中に一人の女性を見かけた。その女性はトングと大きめのビニール袋を持っていて、私が、

「おはようございます。」

と挨拶をすると、笑顔で挨拶を返してくださった。ごみ拾いだろうと思いつながらそのまますれ違ったのだが、後になって「きれいにしてくださいましてありがとうございますいま

す。」の一言を言えば良かったのではないかと後悔した。それと同時に、「あの親切な方には一体どのくらいの人が感謝するのだろうか」と思った。

私がおその人を見かけたのは朝、しかも堤防のため、人通りはとも少なく。そんな時間と場所でごみ拾いしても、それを見かけるのは数人だろう。極端な話、道にごみを捨ててもバレないはずだ。にも関わらず、なぜごみを拾うのか。それを考えていると、私はある出来事を思い出した。

小学生の時、私は家族でお祭りに行った。たくさんの人と屋台に胸を躍らせていると、その中でも一際目立つ緑色のテントと大きなごみ箱が目に入った。どうやらごみ拾いのボランティアができるらしい。私は興味深々で、家族と一緒にボランティアに参加した。それはとても良い経験になった。「ありがとう」「偉いね」などと声をかけてくださる人はいなかったが、気にならなかった。自分にごみを拾うことでお祭りの会場がきれいになっていく。それが嬉しくて、私は夢中でたくさんのごみを拾った。

これを思い出した時、私はいかに自分の考え方が間違っていたかに気づき、恥ずかしくなった。きつとごみ拾いをしてきた女性には、感謝されるためではなく、「自分の住んでいる町をきれいにしたい」と思ったから、あのように行動に移したのである。

当たり前のことだが、私たちは感謝の言葉を受け取るために人に親切にしているのではない。もちろん、人に感謝の気持ちをしっかりと伝えることは大切だと思う。しかし私は、今まで「ありがとう」の一言を聞くことに執着して、親切にする目的を忘れてしまっていた。意味のある行動を起して、意味のある親切をすること。私は女性の姿からこのことを学ぶことができた。私も少しずつ行動に移して、意味のある親切をたくさんの人に届けたい。



「見守る」親切

静岡市立蒲原中学校 三年

村松 芹奈

私は人から勘違いされやすいタイプだと思う。親切だと思ってやったことも、なぜか相手からはいい印象を受けないのだ。言葉が足りないのかもしれない。だけど、言葉が足りないとしても、行動を読み取れば親切でやっていたことが伝わると思う。なら、何が足りないのだろうか。私は、これまでそれが分からなかった。

テレビである番組を見たことがある。私よりも小さな男の子と、その家族を密着した番組だ。私があたり前のようにこなしていることが、男の子にとってはあたり前ではなく、できるまでの大きな壁がある。そのあたり前のボーダーラインを勝手に決めつけたのは私だけ、「もう少し周りが協力してあげればよいのではないか。」とってしまった。男の子がやっていることは、周りが協力してあげればすぐにできるようになることだ。

わざわざつらい思いをしてまで一人でやら

なければならぬのか。そう思った。だけど、

男の子が今までできなかったことが一人で

できるようになった時、男の子の母親が涙

を流して、大切そうに男の子を抱きしめて

いる瞬間を見た時、「ひょっとしたら、私の

考えが間違っていたのではないか。」と思っ

た。人それぞれ得意、不得意がある。もちろ

ん私にもできないことがたくさんある。きっ

と、男の子にとっての「不得意」が私にとっ

ては「得意」だっただけで、何もおかし

いことではない。ただ、将来大人になった時、

いつまでも両親や、自分を支えてくれる人

が周りにいるわけではなく、逆に私が誰か

を支える立場になっているのかもしれない。

そんな時、いつでも自分一人でできるよう

になっていなければ、困ることになるのは

分かりきっていることだ。だからこそ、男

の子の母親はできるようになるまで、自分

も苦しみながらも我が子の成長を見守って

いたのではないかと思っただのだ。もちろん、男の子一人ではどうしようもなくなっ

てしまった時に、すぐに「助けて」といえるよ

うな状況をつくりながら。

その番組を通して気がついたのは、私に

とっての親切が、誰かにとっては「おせっか

い」になっていたのかもしれないということ

だ。まずは、誰だっ一人で挑戦してみた

いものだ。それを、私ができるからといって、

全てをやってしまったら、相手はいつまで

も成長することができない。だから、私も

男の子の母親のように、まずは近くで見守っ

ているべきなのかもしれない。「やってあげ

ようか。」ではなく、「ここをこうしてみたら。」

というアドバイスで何かが変わるヒントに

なるのなら、親切の形を変えて、相手によ

りそっていき、相手が成功するその時まで、

一緒にがんばっていきたい。

思いやりを「ありがとう。」に

森町立旭が丘中学校 二年

村松 李音

私は「小さな親切」というテーマの作文を書く上で、小さな親切とは何だろうとふと疑問に思いました。そこで兄に相談しました。兄は「小さな親切は親切の大きさではなく、誰にでもできる親切」と言っていました。それを聞いて私は誰にでもできる親切について考えてみました。辞書で親切と調べると、相手の身になって、その人のために何かをすること、思いやりをもって人のためにつくすこと、また、そのさま、と書かれています。これを見て小さな親切とは親切をしようと考えながらしているのではなく相手のことを考えて、無意識に行動をとることだと考えました。

例えば、困っている人がいたら声をかけたり、電車やバスでお年寄りに席をゆずったり、学校を休んだ友達に予定を送ってあげることなどです。ありきたりで当たり前

のことだと感じる人も多いと思いますがこれも立派な親切です。中にはこのようなことができない人もいます。このような小さなことでも当たり前前に思っただけで行動できる人は私はすばらしいと思います。

私が小学生の時母親と二人で夜に車で帰っていました。すると田んぼ道のすみから「助けて。」と声が聞こえたと母親が車をバックさせ、その場所まで行きました。そこには犬の散歩にきていたおばあちゃんが犬に引っ張られて田んぼと道路の間の水路に落ちてしまって身動きがとれない状況になってしまっていました。私はどうすればいいかわからず見ていることしかできなかったけれど、母親はすぐさまかけ寄り車に乗せて家まで送っていました。私一人でその状況になったらどうすればいいのかわからなく焦ってしまおうと思います。ですが、このおばあちゃんを見てとっさに行動した母親はすごいと思いました。

このような状況にあうことは少ないと思います。ですがいつ起きてもありえることです。そんな時にすぐに動ける人は素敵だ

など感じました。自分が誰かの力になって、その人から感謝される「ありがとう。」というこの五文字はまほうの言葉だと思いません。誰もがあたたかい気持ちになれること、小さな親切とはそういう素敵なことだと思います。普段の「当たり前」だと感じていることは全て誰かの小さな親切からできていることだと思います。小さな親切を積み重ね、もつと誰もが過ごしやすい社会にしていきたいです。そのためにも「ごめんね。」より「ありがとう。」の言葉を増やし、もっと明るい気持ちになれるといいなと思います。私にもまだまだできないことは多いですが誰かのために思いやりを持って行動できる人になれるようがんばりたいです。まずは身近なことから挑戦し、親切を届けていきたいです。



入選

さりげない優しさでも

静岡県立浜松西高等学校 中部部 二年

山崎 陽奈子

夏休みに入り、私の所属する弦楽部では、音楽コンクールに向けて部員が一丸となって練習に励んでいた。私は中部部からバイオリンを始めたいわゆる初心者だったため、二ヶ月前から人一倍練習をしてきた。必死の思いでメンバーに選ばれ、緊張しつつも楽しみにしていたコンクールであった。しかし、その二日前、家族が体調不良となり規則上、欠席しなければいけなくなった。自分はいたって元気で変わりない。でも、万が一の時はみんなに迷惑をかけてしまうから仕方ない。残念でくやしい思いでいっぱいであった。また、自分が欠席することにより先輩や同じパートの仲間迷惑をかけてしまうことに申し訳なさで心が張り裂けそうになった。私が担当しているパートはともと人数が少ない。私が抜けても大丈夫だろうか。いや、大丈夫な

はずがない。意を決して部活の仲間に休むことを伝えた。

「大丈夫だから安心して。ひなこちゃんの分まで頑張ってくるから。」

短い言葉が返ってきた。音量のバランスを再考したり、ハモリの部分の分け方を変更したり、本当はやるが増えて余裕はないはず。自分に心配をかけまいと言ってくれたのだろう。私は申し訳ない気持ちとなった反面、自分が抜けても物事が進んでいくことに焦りを感じた。私にとっては、初めてのコンクールでありとても楽しみにしていた。仲間からの短い返事は自分は必要とされていないのではないかとも感じ取れてしまった。

コンクール当日の夜、ショックで何も手につかなかった私に、親友から連絡が来た。会場までの移動中のバスでの出来事、サーブエリアで食べたアイスの話、買ったお土産の紹介など様々なことを伝えてくれた。そして、

「全国大会に行けたら、絶対一緒に行こうね。楽しみにしててね。」

と何度も言ってくれた。最初はその言葉を素直にとれない自分がいたが、そのうち親友が本心で言ってくれていると思えるようになってきた。そしてその言葉のおかげで、次は自分も会場に行つて頑張りたいという前向きな気持ちになった。親友のさりげない優しさは、まさに私を失望から守ってくれる心のワクチンだと感じた。嬉しいという単純な言葉では言い表せない貴重な経験だった。

こんな世の中だからこそ、支えてくれる人の大切さ、言葉に込められた優しさに気づけたと思う。親友にとってはさりげない優しさだったのかもしれないが、私にとっては涙が出そうなほど嬉しかったように、小さな親切でも人を幸せにすることはできるはずだ。人のために行動するのは少し難しそうなイメージがあるが、声をかけるくらいは自分にだって可能だ。皆が他人のために動ける「親切の輪」が広まっていくことを願って、コロナに負けずに明るく生活していきたい。